



### 特集 古写経を科学の目で見る

天野山金剛寺所蔵古写本の科学分析 / 坂本 昭二 江南 和幸

古写経と唐櫃 / 吉川 也志保

#### 《古写経紹介・その四》

日本古写経本『賢愚経』とその伝来 / 三宅 徹誠

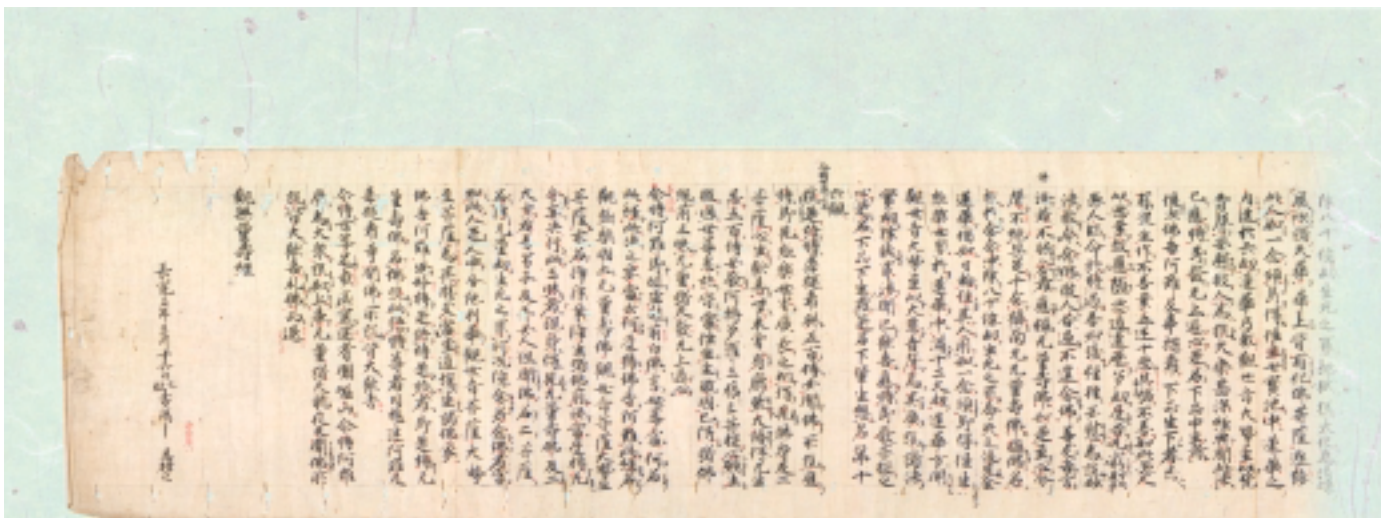
#### 《寺院紹介》

徳運寺 / 大塚 紀弘

#### 《蔵の中 -TOPICS-》

書陵部に残る新羅浄土教の遺文 / 南 宏信





金剛寺蔵『観無量寿経』巻尾

《表紙写真紹介》

金剛寺蔵長寛三年写『観無量寿経』

箕浦 尚美

『観無量寿経』は、『無量寿経』『阿弥陀経』とともに「浄土三部経」の一つに数えられ、親しまれてきた經典である。

大阪府河内長野市の真言宗御室派の名刹、天野山金剛寺に蔵される『観無量寿経』は、長寛三年（一一六五年）に書写された卷子で、末尾に、

（朱書）「西音房云々」

（墨書）「長寛三年三月十六日記書了 忍禪之」

とある。「西音房」「忍禪」はともに不明であるが、全体にわたって詳細な訓点と異本注記が施されており、当時の読みと字間の様相を伝える貴重な資料である。訓点には、書写時をさほど下らないと見られる朱点と、それよりやや後れるも院政期には収まると推定される墨点がある。

朱で記されたヲコト点（読みを示す点や線の記号）は、「天爾波留点（別流）」と呼ばれる種類の点に最も近い。これは、平安時代中期頃に天台宗延暦寺で案出され、十二世紀中葉には殆ど衰滅してしまう点である（築島裕氏『平安時代訓点本論考 研究編』汲古書院、一九九六年）。金剛寺本の「ヲ」の点はすべて当該字中央下に「ㇿ」の形で表されているが、これは、この系統の古い特徴を示すものである。加點場所は延暦寺で、加點者は弱小の法脈につながる、恐らく無名の僧侶であったと考えられる。また、墨点は、朱点と部分的には重なるが、朱点をなぞったものではなく、別の訓法・異文を伝えていると考えられる（以上、訓点については、後掲の日本古写経善本叢刊第三輯の金水敏氏他の解題による）。

さて、經典本文を見てみると、金剛寺本『観無量寿経』は、

高麗版や宋版などの一切経版本とは系統が異なり、敦煌本に近い。浄土教版本の流れを汲む浄土教各宗派の現行本も、一切経版本より日本古写経本や敦煌本に近いが、金剛寺本とは異なる系統である。金剛寺本に近似する伝本には、五島美術館所蔵の建久三年（一一九二年）明遍書写本や京都国立博物館所蔵の平安後期装飾経がある。

本文に関して特に興味深いのは、源信『往生要集』（九八五年）所引の『観無量寿経』との関係である。比較したところ、金剛寺本とのみ、或いは金剛寺本を含む数本とのみ一致する語句が見られた。金剛寺本は、源信の依った系統として留意されるべきであろう。

また、『観無量寿経』の内容・成立に関する問題として注目される語句の異同もある。下品下生に「具足十念称南無無量寿仏」とあるのがそれで、金剛寺本、京都国立博物館装飾経、松尾社一切経本のみに見られる（傍線部は他本では「仏」「阿弥陀仏」）。『往生要集』のほか、曇鸞『無量寿経優婆提舍願生偈註』などにも「無量寿仏」として引用されており、敦煌本には見られないものの、検討が必要な語句である。

なお、本書については、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『日本古写経善本叢刊第三輯「金剛寺蔵観無量寿経 無量寿経優婆提舍願生偈註巻下」』に、影印・訓読・解題（金水敏・広坂直子・岡崎友子）・諸本校異（箕浦尚美）を掲載している。

（研究員（PD））

## 目次

《表紙写真紹介》

金剛寺蔵長寛三年写『観無量寿経』 ————— 箕浦 尚美 (1)

### 特集 古写経を科学の目で見る

金剛寺は紙の博物館

天野山金剛寺所蔵古写本の科学分析 ——— 坂本 昭二／江南 和幸 (3)

先人による創意工夫

古写経と唐櫃 ————— 吉川 也志保 (5)

《古写経紹介・その四》

西域を伝わってきた跡が垣間見える

日本古写経本『賢愚経』とその伝来 ————— 三宅 徹誠 (7)

《寺院紹介》

山間に息づく一切経の歴史

徳運寺 ————— 大塚 紀弘 (9)

《蔵の中 -TOPICS-》

唐・新羅・日本に渡る議論

書陵部に残る新羅浄土教の遺文 ————— 南 宏信 (11)

《活動記録》

デジタルメディアの活用の今後を探る

公開シンポジウム ————— (13)

古写経を様々な角度から研究する

公開研究会 ————— (14)

[出版物紹介]

日台研究者の最新成果がここに!

『佛教文献と文学 日臺共同ワークショップの記録 2007』 ————— (14)

今後の予定・スタッフ紹介、その他 ————— (15)

いとくら：私たちが調査している古写経を収める「経蔵」からの造語。「経」を意味するサンスクリット語“sūtra”には「いと」などの意味があり、また「経」には「たていと」という読みがあることから、「経蔵」を「いとくら」と読んでニューズレターのタイトルとしました。



# 古写経を科学の目で見る

金剛寺は紙の博物館

## 天野山金剛寺所蔵古写本の科学分析

坂本昭二／江南和幸

大阪の河内長野にある天野山金剛寺に所蔵されている古写本12点を調査する機会をいただき、約2ヶ月間に渡って実施した調査の報告を以下に述べる。

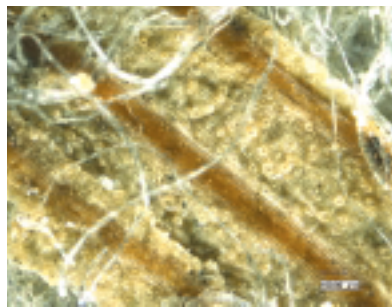
今回の調査では表1に示した12点の資料(1)～(12)の分析を行った。尚、資料(4)(5)(6)(10)には記年が残されており、それぞれ平安後期から鎌倉前期の書写であることがわかっている。

本調査では、デジタル顕微鏡による料紙の表面観察、蛍光X線分析装置による元素分析、紙厚測定、透過光撮影と周波数解析による簀の目の計測、そして赤外線を用いた撮影を行った。紙面の都合上全ての分析結果について述べる事が出来ないが主な結果を以下に述べる。

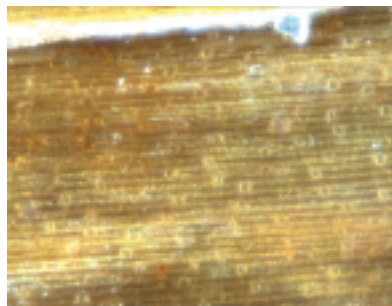
まずデジタル顕微鏡による料紙の観察では、12点全ての資料の料紙が楮を主原

料として作られている紙であることが確認できた。さらに、資料(1)(2)(3)(4)

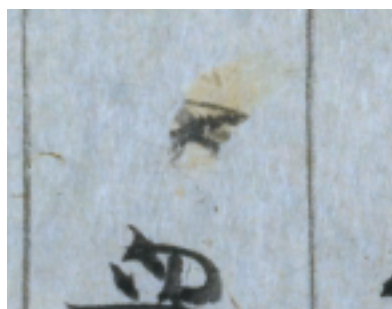
(5)(8)(12)には稲藁の混入が見られ(図1)、資料(6)(7)(10)(11)にも稲藁と思われる混入物が見受けられた。さらに資料(2)及び(12)には麦藁の混入も見られた(図2)。従って、平安時代から鎌倉時代にかけての紙造りには主原料としての楮の他に稲藁や麦藁が補助原料として使われていたことがわかる。



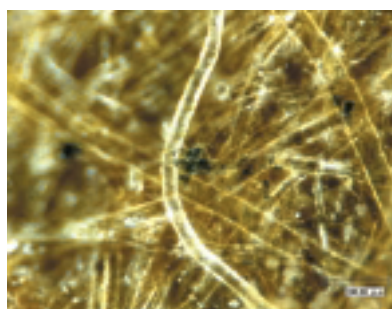
[図1] 大宝積経 卷第六十六の稲藁 (200倍)



[図2] 大般若波羅蜜多経 卷第十七の麦藁 (800倍)



[図3] 大宝積経 卷第六十六の古紙断片



[図4] 般舟三昧経 巻下に残る墨の跡 (500倍)

大宝積経 卷第六十六(資料(4))には墨で書かれた文字跡が残る古紙の断片(大きさは1cm程度)の混入が見られ(図3の中央部分)、さらに、顕微鏡による観察においても料紙全体に渡って微小な墨跡が多数見られた。この結果は大宝積経(資料(3)(4)の料紙が宿紙(古紙を原料として漉き返した紙)であることを裏付けている。宿紙は薄墨色をしており、一見して再生紙であることがわかる色をしているが、一方で、薄墨色でない料紙からなる資料(1)(2)(7)(8)(10)(11)(12)にも微小な墨跡が見受けられた(図4)。すなわち、宿紙以外の料紙も古紙を補助原料として使

用していることが確認された。このことから、当時の都市部における紙の大量消費に起因する製紙原料難の問題を解決する手段として、補助原料としての稲藁、麦藁、古紙の使用が行われたと思われる。次に紙厚と簀の目の計測結果から得られた知見について述べる。各資料ごとの紙厚の平均値、及び、1cm当たりの簀の目の平均本数を表1に示す。但し、紙厚のデータに関して、資料(7)(8)(9)(11)は形態が袋綴じであったり、状態の悪いものであったために採取したデータに偏りがあり、表中のこれらの資料に関する( )で囲まれた計測値は参考程度に留めて頂

きたい。資料(4)(7)(8)は薄い紙が使われており、特に資料(4)は地合の良い紙でもあった。經典に限っては、その料紙の厚さが0・12mm程度のもものが多く使用されていた。次に簀の目(紙を漉いた後に残る縞状の模様)に関しては、その本数が1cm当たり4～6本の料紙が多く見られた。簀の目の本数は道具(簀)に依存した値であるので漉き手による影響をあまり受けない値である。

ここで、特に大宝積経の2点(資料(3)(4))について言及しておく。この2点の共通点は共に宿紙であり、表面の色もほぼ同様の値を示し、比較的細かい簀の目(約8本/cm)が計測され、蛍光X線分析による料紙の元素分析の結果についてもほとんど差はなかった。すなわち、原材料や道具(簀)に起因する計測値には顕著な差は

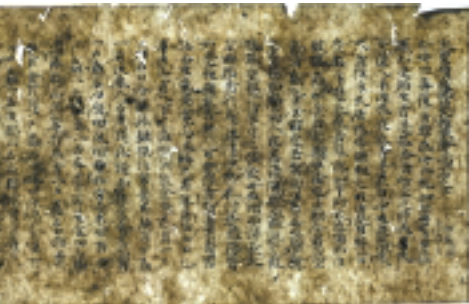
見られなかった。さらに、紙の裏側(文字の書かれていない面)に多くの填料、および、縦方向の紙繊維の方向性が見られる点も共通していた。しかし、漉き手の技量によって影響を受けやすい紙厚の値と地合に関しては顕著な差が見受けられ、資料(4)は紙が薄く(平均0・07mm)、地合の良い紙(図5)であるが、資料(3)は地合の悪い紙(図6)であった。また、本調査の後に金剛寺にてこの2点以外の異なる巻の大宝積経を10点程調査する機会があった。これらの中には簀の目の本数が約6本/cmの紙や簀の目の見えな

い紙が見られ、大宝積経には様々な宿紙が使われていることがわかった。大般若波羅蜜多経巻第十九(資料(1))の表紙(図7左)についても分析を行った。この表紙は装飾されているが、その文様は

確認しがたい。そこで、まず蛍光X線分析で調べたところ、金箔、銀箔、雲母を使って装飾されていることが明らかとなった。次に赤外線撮影により酸化して黒ずんだ銀箔部分を明瞭に浮かび上げらせることができた(図7中央)。この装飾には金箔より銀箔が多く使われ、雲母が全体的に塗られていた様であり、全体の文様を推定することが出来た(図7右)。



【図5】大宝積経 卷第六十六(資料(4))の透過光撮影画像



【図6】大宝積経 卷第五十七(資料(3))の透過光撮影画像



【図7】大般若波羅蜜多経 卷第十九の表紙  
(中央:赤外線撮影画像、右:推定復元結果)

【表1】調査した資料とその計測結果

番号	經典番号	題名	記年	紙厚 [mm]	簀の目 [本/cm]
1	貞1-19a	大般若波羅蜜多経 卷第十九	-	0.12	4.8
2	貞1-17b	大般若波羅蜜多経 卷第十七	-	0.12	6.1
3	貞32-57	大宝積経 卷第五十七	-	0.11	7.7
4	貞32-66	大宝積経 卷第六十六	建久九年(1198年)	0.07	8.3
5	貞223-1	仏説観無量寿経	長寛三年(1165年)	0.12	4.6
6	貞1067-3	阿毘達磨識身足論 卷第三	嘉禎三年(1237年)	0.12	5.2
7	聖教6-31	佚名孝養説話集抄(仮題)	-	(0.08)	5.7
8	聖教11-108	憂喜余の友(千代野物語)	-	(0.08)	6.0
9	聖教28-45	念仏要文抄(仮題)	-	(0.12)	4.9
10	聖教41-71	三宝感応要略録 卷上	仁平元年(1151年)	0.2	5.2
11	聖教44-1	医心方	-	(0.2)	4.6
12	聖教50-41	般舟三昧経 卷下	-	0.13	5.8

今回は12点の資料を調査したが、中世の紙の一端を明らかにすることが出来た。金剛寺に所蔵される数千点の資料は中世の紙の博物館の様相を呈しており、今後の調査継続によってさらなる知見を得られると期待される。

【附記】

今回、貴重な資料の調査の機会を与えて下さった落合俊典先生、金剛寺の関係者の皆様、多岐に渡る御助言を頂いた赤尾栄慶先生ならびに箕浦尚美先生に感謝します。

【参考文献】

『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』(研究代表者落合俊典)

【執筆者紹介】

坂本 昭二(さかもと しょうじ)

大阪府生まれ。龍谷大学大学院理工学研究科博士後期課程修了。博士(工学)。現在は同大学古典籍デジタルアーカイブ研究センター研究員、国際敦煌プロジェクト日本センタースタッフ。専門分野は、計算機科学、デジタルアーカイブ、文化財の科学分析など。

江南 和幸(えなみ かずゆき)

龍谷大学名誉教授(龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センター所属)。従来の専門は金属材料学。1997年より、龍谷大学大谷コレクションの文物、特にアジアの紙資料の組織分析、元素分析、また彩色材料の科学分析に取り組み。大英図書館スタンコレクション經典用紙分析の共同研究にも取り組み。

## 古写経と唐櫃

吉川也志保

七寺では、一切経および唐櫃からびつが重要文化財に指定されている〔図2〕～〔図4〕の七寺唐櫃の実測図は、『尾張史料 七寺一切経目録』七寺一切経保存会(1968)からの抜粋である。今回は、このような唐櫃を古写経の保存容器として捉える視点から紹介したい。まず、関根真隆氏によると、日本でみられる櫃類には、櫃、明櫃、折櫃、倭櫃、そのほか小櫃、細櫃、六角・八角櫃などが挙げることができるという。以下に要約すると、『正倉院文書』その他奈良時代の文献には、「辛櫃」および「韓櫃」と呼ばれていたものが、今日「唐櫃」として定着したと考えられる。また、唐櫃には、白木と漆塗りのものがあるが、

經典・文書類を収めた唐櫃には漆塗りが多いという。

近年、成瀬正和氏による保存科学的調査で、正倉院所蔵唐櫃の内部と外気の湿度を比較測定したところ、唐櫃内部における相対湿度の変動が抑制され、ある程度の調湿効果が認められるという成果が発表された。学術フロンティアのプロジェクトに参加させていただいた折に、筆者も

七寺所蔵唐櫃の内部を、自動温湿度記録計を用いて測定させていただいた。その結果、外気の相対湿度は約40～90%の変動が見られたにもかかわらず、唐櫃内部は夏季を通して相対湿度約60～65%と安定した環境を保っていたことが明らかになった(その調査結果の一部は、『日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集』p.118で報告した)。

ここで、紙を保存するのに適切な温度と湿度に関する近年の研究動向と見解の変遷を簡潔に説明する。アレニウスの定理にしたがうと、温度の上昇にともなって、あらゆる化学反応の速度は速くなることから、高温な環境は紙の化学的劣化を速めてしまうと言える。また、高温多湿な環境は、害虫や微生物による被害を誘発する。一方、高温低湿な環境は、紙、糊などの過乾燥と脆弱化を引き起こすという点も指摘されている。

温度25℃、相対湿度50%の状態を標準と定めて、異なる温湿度条件における紙の寿命を測定したりチャード・D・スミス氏のデータでは、低温低湿であるほど紙の寿命



〔図1〕七寺唐櫃

は長くなるという結論が出されている。しかし、稲葉政満氏は湿度に関して、水分は紙の中で潤滑油としての役割を果たしているという側面から、低い湿度が必ずしも好ましくはないという見解を示している。

紙媒体を保存するための温湿度環境に関しては、すでに様々な基準が設けられている。かつて、IFLA(国際国立図書館連盟)は、適切な保存環境として温度16～21℃、相対湿度40～60%を推奨していた。また、ISO(国際標準化機構)が発表した『図書

館・文書館の保管条件(ISO:ISO11799 Document storage requirements for archive and library materials, 2003)』では、「紙媒体で最高位の保存環境を求める場合、温度は一日の振幅の許容値を±1℃として、最低温度2℃・最高温度18℃としており相対湿度は一日の振幅の許容度を±3%として最低30%・最高45%」としている。一見すると、IFLAの基準に対してISOの規格は、推奨されている温湿度の変動幅が大きいような印象を受けるが、

仮に冬が2℃で夏が18℃と考えた場合、その振幅を一日±1℃とすることで、急激な変化を避けた穏やかな変動を実施することを提唱している。同様に、利用の多い紙媒体資料の場合、やはり「一日の振幅の許容値は温度±1℃、相対湿度±3%として、最低温度14℃、最高温度18℃、相対湿度は最低35%、最高50%」を推奨している。こうして、より幅広い地域に適用しうる値が設定されたように、現実的には保存環境は各地域の気候から大きな影響を受けざるを得ない。

IFLAもまた、「これまで理想的な温度と湿度の値を保つために多くの試みが行われてきた。しかし現在では、特に大幅な

温度変化がある地域において、莫大な費用をかけて書庫内の年間温度を一定に保つような方法は現実的ではないと考えられている」という見解を示した。

このことは、あらゆる国や施設に向けて絶対的な理想環境を求めるのではなく、地域条件、所蔵資料、主たる劣化要因のタイプに合わせた理想的環境を柔軟に考えていく必要性を示している。日本では、多くの古文書・古典籍を現在まで良好な状態で保ってきた冷泉家文庫（ひがねのくまろ）などの環境測定が行われている。その結果、実際には、相対湿度が70%を越えることも多いが所蔵資料の保存状態は良好であるという。書物の理想的な「保存環境」をつくる

ことを実現するには、その国あるいは地方独自の歴史的背景や気候風土を色濃く反映してきた「保管環境」をいかに保持、あるいは改善すべきかを検証することが、重要な課題となる。

無論、適切な保存箱に入れたからといって、文書の劣化には材質的な要因や、有害生物による被害なども考えられ、また我々を取り巻く気候・環境も時代により変化しているという他にも、留意しなければならぬ点が数多くある。そのため、放つにおいても未来永劫、文書が保たれるという単純な理屈ではないところが文書保存の難しいところではあるが、先人たちのこういった工夫をみれば、文物を後世に遺

すという活動は決して現代に始まったものではないということを実感できるだろう。

#### 【参考文献】

関根真隆「正倉院への道」第四 正倉院古樞考（1991）

『尾張史料 七寺一切経目録』七寺一切経保存会（1968）pp.183-227

成瀬正和「正倉院北倉の温湿度環境」『文化財保存修復学会誌』第46号所収（2002）pp.66-75

Richard D. Smith, *Non-aqueous Decidification of Paper and Books*, Doctoral Dissertation, University of Chicago, 1970

稲葉政満「図書館・文書館の環境管理」日本図書館協会（2001）pp.21-22

Edward P. Adcock, *IFLA Principles for the Care and Handling of Library Materials*, 1998

吉田治典「文庫の保存環境・実測と予測」『記録資料の保存と修復——文書・書籍を未来に残す』所収、アグネ技術センター（1995）pp.66-80

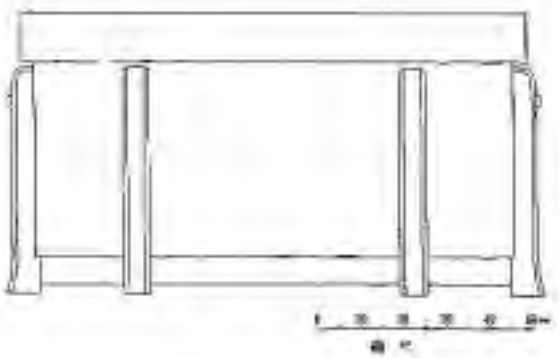
吉川也志保「フランス国立図書館の保存環境調査からみる予防的資料保存の実践」『日仏図書館情報学会誌』第31号所収（2005）pp.50-69

#### 【執筆者紹介】

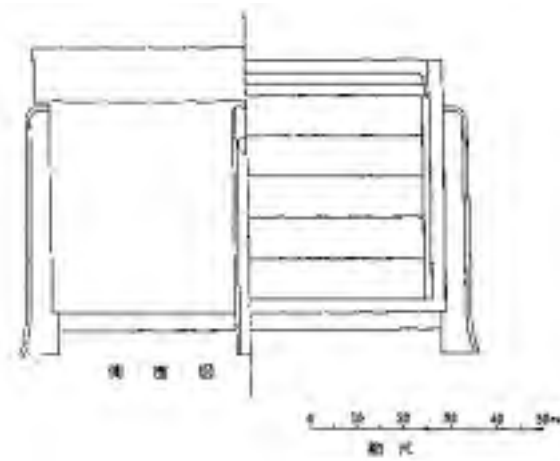
吉川 也志保（きつかわ やしほ）

東京都生まれ。東京学芸大学文化財科学科卒業。フランス国立図書館保存部での研究インターンを経て、保存環境調査などを学ぶ。一橋大学大学院にて博士号（学術）取得。

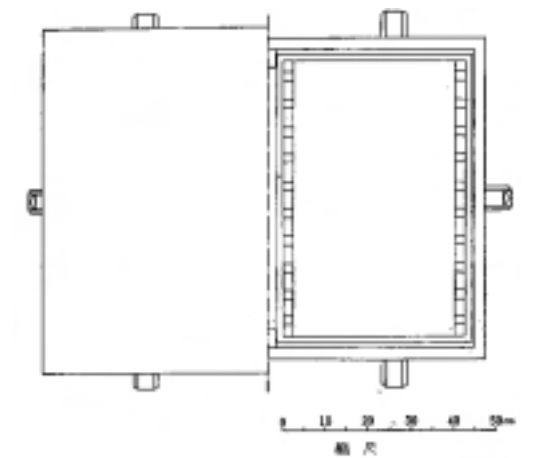
現在、東京文化財研究所保存修復科学センター研究補佐員。



【図2】七寺唐櫃正面図



【図3】七寺唐櫃側面図



【図4】七寺唐櫃上面図

西域を伝わってきた跡が垣間見える

## 日本古写経本『賢愚経』とその伝来

三宅 徹誠

『賢愚経』は、仏の前世にまつわる話などを集めた説話集である。有名な話では、ある貧しい女性が仏陀のために油を買って捧げた灯明が風が吹いても消えなかったという「貧女の灯」、法隆寺の玉虫厨子に描かれた「捨身飼虎」の物語（『金光明経』にも説かれる）などが収められている。『出三蔵記集』巻九によ

れば、本経の成立は以下のようなものである。8人の僧侶が、中央アジアのホータンで行われた法会で各々話を聞き、漢訳して書き写し、トルファンでそれらをつつにまとめて成立した。その後、それが涼州に伝来した時、既に説話をまとめた経典が多数あったので、釈慧朗がそれを『賢愚経』という名にしたという。5世紀中頃のことである。

## 『賢愚経』諸本の概要

『賢愚経』は説話集であるが、諸本によってその収録された説話の数と説話の順序、そして巻数が異なっている。高麗版13巻62話、金版13巻65話、契丹版・宋（思溪）版・磧砂版・元（普寧）版・明（嘉興）版は13巻69話である。チベット訳は概ね12巻51話である。

## 日本古写経本『賢愚経』

本学学術フロンティアでは、興聖寺（京都市）・七寺（名古屋市中区）・金剛寺（河内長野市）・西方寺（大和郡山

## 古い形を残す日本古写経本

本文を見てみると、高麗版では全ての説話が「如是我聞」で始まっている。しかし、宋元明版では、6話が「如是我聞」でない文で始まっている。日本古写経本では、宋元明版の6話に加えて、更にもう1話でも「如是我聞」でない文で始まっている。それに関してはチベット訳も同様である。しかし、「如是我聞」で始まっていないとしても、話の構成や内容が奇妙なわけではない。おそらく高麗版もしくはその祖本は、冒頭に「如是我聞」などを付加して編集したと考えられる。その理由は、全ての説話の冒頭を「如是我聞」で統一しようとしたからであろう。妻木直良氏は、高麗版と宋元明版を比較して、「如是我聞」などを付加していないものが古い形であると既に指摘しているが、日本古写経本やチベット訳は、それらより更に古い形を保持していると言えよう。

## 日本古写経本の流伝

『一切経音義』使用本と日本古写経本の関連に話を戻そう。玄応（7世紀頃）は長安の大慈恩寺に居り、慧琳（737～820）も音義を撰述して長安の西明寺で没し、その音義は西明寺に保管されたとされる。また、奈良時代の僧である玄昉（？～746）は、717年に唐へ渡って長安に至り、一切経を得て735年に日本に帰国した。おそらく、玄昉がもたらした一切経中の『賢愚経』の転写本が、興聖寺などに残る日本古写経本である。奈良時代に日本に伝来

市）所蔵の『賢愚経』写本を調査した。興聖寺本以外には欠巻があるものの、すべて同じ巻数・説話数・説話順で、全17巻69話であると思われる。

その他に、内容が一部明らかになっている日本古写経本『賢愚経』には、東大寺本と石山寺本がある。

東大寺本とは「大聖武」の名で知られている奈良朝写経である。断簡の状態で各機関や収蔵家のもとに散存しているものが多く、全体像を明らかにするのは困難である。かつて、福井利吉郎氏がその断簡の多くを調査し研究された。福井氏は、東大寺本は16巻本であると論じられた。しかし、本学学術フロンティアの調査により明らかになった日本古写経本と比較すると、説話の順序は全く同じである。興津香織氏によれば、16巻本というのは憶測に基づくものであり、17巻本の可能性も十分にあるということである。

石山寺本については、石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究―一切経篇―』に調査結果が掲載されている。それに拠れば、全17巻で、各巻頭の説話は、調査済みの日本古写経本とすべて同じ話、同じ順番であった。

日本古写経本ではないが、もう一つ着目すべきものがある。玄応（7世紀頃）と慧琳（737～820）がそれぞれ『一切経音義』を撰述した際に用いた『賢愚経』である。『一切経音義』は、仏典中に出てくる語句の音と意味を掲載した辞書である。経典ごと・巻ごとに分けられて語句が掲載してあるので、その語句がその経典の第何巻にあるかがわかる。よって、見出しに採られた語句を含む説話を収める巻とそのした当時の形のままで本文を変えることなく書き写されたため、古い形を保持しているのである。以上から、日本古写経本と『一切経音義』使用本は、ともに「7、8世紀頃の長安」というキーワードにたどり着く。2本とも当時の長安付近に伝播していたテキストを底本としている可能性が高い。

ホータンで説かれた物語が、トルファンで一つの書物となり、涼州へもたらされ、そして長安に伝播した。その『賢愚経』が、奈良時代の日本に伝わり、後に転写されていった。各地の平安写経を読み返すと、本文には高麗版などの諸本よりも古い形が残っており、シルクロードをたどり伝来してきた西域の香りが今もそこに残っているのである。

## 【参考文献】

- 福井利吉郎「東大寺本賢愚経の研究」〔『藝文』3巻11・12号、1912年〕、福井利吉郎美術史論集 上〔中央公論美術出版、1998年〕に再録
- 石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究―一切経篇―』〔法蔵館、1978年〕
- 興津香織「日本伝来『賢愚経』の復元的研究」〔『仙石山論集』3、2006年9月〕
- 妻木直良「敦煌石室五種仏典の解説」〔『東洋学報』1―3、1911年10月〕
- 三宅徹誠「賢愚経」諸本比較研究―敦煌本と日本古写経本を中心に―〔国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編』仏教文献と文学 日台共同ワークショップの記録2007、2008年〕

（本学附置国際仏教学研究所非常勤研究員）



金剛寺蔵『賢愚経』巻第五巻首 冒頭に見える「沙弥守戒自殺品」は高麗版では第23話（巻第五）、宋元明版では第19話（巻第四）

説話の順序がある程度解明できる。検討の結果、玄応と慧琳の音義に用いられた『賢愚経』はほぼ同じものであり、全16巻69話であると推測できた。紙面の都合上詳細に説明できないが、日本古写経の説話の順序は『一切経音義』使用本と近いと思われる。2本は、巻九までおそらく同じ説話順であり、巻十二・巻十五の調巻及び説話順も同じであると考えられる。更に、日本古写経本巻十四は『一切経音義』使用本の巻十三に対応すると推測される。よって、日本古写経本は、諸本と比べて系統的に『一切経音義』使用本に近いと思われる。



## 徳運寺

山間に息づく一切経の歴史

天龍山徳運寺は、臨済宗方広寺派の寺院で、愛知県新城市しんじょうしの名越という山間の小さな集落にあります。南に面する本堂の須弥壇には、本尊の聖観音菩薩が祀られています。西方にそびえる標高六八四mの鳳来寺山を始めとして、緑豊かな山林に囲まれた静かな環境で、寺の裏手には、東西に清流の板敷川（宇連川うれがわ）が深い渓谷を形作っています。

江戸中期までの徳運寺の歴史については、同寺所蔵の『徳運寺過去帳』から、次のようなことが読み取れます。戦国時代に徳運寺を開いたのは、禅僧の「偃溪月和尚」（一五九一）でした。遠江国奥山（現在の静岡県浜松市引佐区奥山）の方広寺には、有力な門派が四つあり、和尚はそのうち方広寺第四世の在徳建けん穎えい（一三五六～一四〇九）が開いた塔頭三生院の門派（三生派）に属していました。溪月の没後は、門弟の三更和尚（一六〇九）が二世となりました。

五世の玄的和尚が没した元禄二年（一六八九）の頃には当初の建物が傷んでしまったようで、檀越の招きで六世となった拈室全提（一六九九）が復興に乗り出しました。そして、神谷八兵衛の支援を受け、同十年に堂宇の再建を果たしました。全提はその次第を『当山略由序』に書き残しています。

開山の「偃溪月和尚」については、残念ながら諱（実名）が確定できません。禅僧は中国の慣習に倣って、出家した時に名乗る諱の他に道号を持つことがあり、その場合は諱の上に道号が冠されました。例えば有名な一休さんの「二休」は道号で、実名は「宗純」ですから、一休宗純となります。また、禅僧は実名の上の一字を略して呼ばれることもありましたが、「溪月」だとすると、実名は□偃（上の一字は不明）ということになります。なお地元には、永禄三年（一五六〇）に



徳運寺・石碑と本堂（奥）

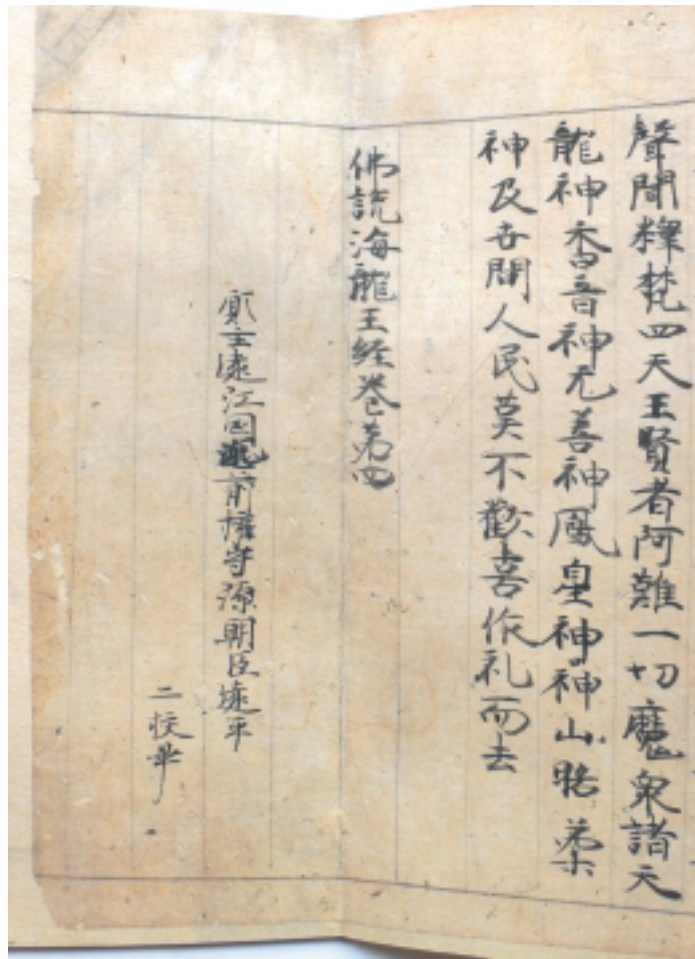
提を弔うために、堀八左衛門親正という絵師に描いてもらったもので、毎年涅槃会の時に本堂に掛けられます。また、本堂奥の脇壇には、小像ながら端正なお姿の薬師如来が安置されています。この坐像は、以前は寺の近くにあった薬師堂に祀られていたそうです。

## 徳運寺一切経

この度、本学学術フロンティアでは、徳運寺所蔵の古写経及び古版経百三十点を調査させていただきました。そのうち平安末期から室町後期までの五十五点は新城市の文化財に指定されています。これらの古写経は、昭和三十八年（一九六三）に本堂の奥から木箱に入れられた状態で発見されたそうです。今回、奥書、体裁等を分析した結果、次の三つの古写経群が含まれることが分かってきました。

釣月寺の住職であった溪月によって創建されたという言い伝えもあるそうです。釣月寺は新城市副川にある方広寺派の寺院で、応永元年（一三九四）に在徳建穎が開いたと伝えられます。徳運寺には縦二m余りの色鮮やかな涅槃図が所蔵されています。この絵画は、宝永三年（一七〇六）に八世の円応恵教が、前年に亡くなった先代の沢道和尚の菩

最も注目されるのが平安末期の古写経で、二十六卷分二十四種が見出されます。縦二五～二六cmで、現在は折本装ですが、一部に残る痕跡から、かつては卷子装であったと見られます。一切経書写の目録と想定される中国唐代成立の『貞元新定釈教目録』の入蔵録には二二〇六種の仏典が挙げられています。二十六卷



徳運寺蔵「海龍王經」巻第四巻尾 奥書に「願主遠江国筑前権守源朝臣遠平」とある。

分の平安古写経をその入蔵録の配列に従って並べると、二番から一一七五番まで万遍なく分布します。また、奥書がある六点については、年代順に並ぶのですが、元は一切経の一部を構成していたと考えられます。奥書から、この一切経書写事業は、治承三年（一一七九）頃までの約七年間にわたって、遠江国（今の静岡県西部）の武士である源遠平とその妻を願主として実施されたことが分かります。

一切経が有名で、四九五四巻が現存しています。七寺一切経の書写事業は尾張国の武士である大中臣安長夫妻の発願によるもので、書写の時期も含めて徳運寺の源遠平夫妻発願一切経と多くの共通点があります。平安古写経については、最近の調査で興味深い事実が判明しました。すなわち、十五点の古写経の裏に、表とは別の古写経の墨影が写っているのです。存欠や濃淡に差があつて多くは判読しにくいものの、表と同じ頃の筆跡のようでした。そこで、パソコンで仏典の語句が検索で

きるCBETA電子仏典というソフトを活用して、墨影の文字を検討しました。その結果、十種の仏典名称が判明しましたが、いずれも徳運寺に現存する古写経のものではありませんでした。したがって、現在より多くの古写経が一括して保管されていた際に、何らかの理由で裏写りしたのでしょう。このことは本平安古写経が一切経の一部であつたことの傍証になります。なお、裏打ち紙の上にも一部墨影があることから、書写後相当の時を経て裏写りが起こつたことは確かです。このように、伝来の経緯も含めて、徳運寺平安古写経はまだ多くの謎を秘めているのです。

次に、室町末期の古写経が最も多く、六十三巻分二十四種あります。折本装で、縦が約二七・五cmという特徴があります。これらは天文九年（一五四〇）頃から約四年間に、方広寺の二大門派である東隠派と臥雲派の禅僧たちによって書写されたものです。完遂したかどうかは不明ながら、書写に一定の傾向が見出せないことから、方広寺に一切経を備える目的による事業であつたと推定されます。書写の底本は、南宋時代に中国の福州で刊行された版本またはその系譜を引く写本が用いられたようです。

最後に、『大方広仏華嚴経』『大般涅槃経』など二十七巻分四種は、折本装で、縦が二八・五cm前後という特徴があります。これらは室町時代に桃園妙仙禅尼という在家尼の追善のために書写された五部大乘経の一部と考えられます。五部大乘経は大乘の教法を説く代表的な五部の経典として、平安後期より天台宗を中心に盛んに書写されました。

その他、珍しいものとして、南宋時代の中国湖州で刊行された版本大蔵経（思溪版）の断簡七紙があります。これは『仏説持明蔵瑜伽大教尊那菩薩大明成就儀軌経』巻一で、末尾の一葉に「甲州加賀美法善寺蔵経」の印記があり、以前は法善寺（山梨県南アルプス市）に伝来していたことが分かります。

以上のような古写経・古版経は発見後、文化財指定分を中心に保存処置が加えられ、良好な状態で保存されています。我々が充実した調査をさせていただけののも、徳運寺および檀家の皆様 の尽力があつてのことだということを忘れてはならないのです。

#### 【参考文献】

鳳来町教育委員会編『鳳来町誌 歴史編』鳳来町、一九九四年

唐・新羅・日本に渡る議論

# 書陵部に残る 新羅浄土教の遺文

南 宏信

今回紹介する書陵部所蔵奈良朝写本、新羅僧玄一撰『無量寿経記』は伝本中で、最も依拠すべき稀観本である。

撰者である玄一の事績を伝える伝記は存しないので彼の詳細な生没年代は不明である。但し『正倉院文書』には天平二十年(七四八)に『無量寿経記』を写した記録があるので(石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』、一九三〇年)、それ以前の人であることがわかる。さらに本文には浄影寺慧遠(五二三〜五九二)、窺基(六三二〜六八二)、元暁(六一七〜六八六)、法位(七世紀頃)の著作を引用するので、これらを勘案すると玄一の生存年代は、七世紀から八世紀初めとなる。『無量寿経記』は特に法位に依拠しながら論じている点特徴的である(恵谷隆戒『浄土教の新研究』、一九七六年)。

『無量寿経記』の伝来は、前述の通り『正倉院文書』の天平二十年(七四八)に書写されるのが嚆矢であり、高山寺蔵『東域伝灯目錄』(一〇九四成立、高山寺本は院政期から鎌倉時代初期の写)、『三宝院経蔵目錄』(一二九八)に『無量寿経記』の書目を見ることができ。現存諸本は『両卷経記』のみが伝わっているが、『両卷無量寿経疏』、『両卷無量寿経記』、『無量寿経述記』等の呼称もあり一定した名は見られないようである。また撰者名も「玄一集」「玄一師」「玄一述」「玄一」の呼称が見られ、一定していない。

佐藤哲英博士は源信の『往生要集』に見る朝鮮浄土教の影響として、憬興(七世紀中〜八世紀初)の『無量寿経述文贊』九回、義寂(七世紀〜八世紀初)の『無量寿経述義記』三回、元暁の『無量寿経宗要』三回に列して玄一の『無量寿経疏』(記)九回を挙げている。ところが、時代が下がり、源隆国(一〇〇四〜一〇七七)の『安養集』(一〇七〇)と編者未詳の『安養抄』(十一世紀末葉)を見ると、以下の点が指摘できる。一方では『往生要集』と同じく新羅の諸師を多々引用する。他方玄一に關しては、『安養抄』はわずか二回のみであり、『安養集』は一回の引用すらしていない(『叡山浄土教の研究』、一九七九年)。

更に後代でもしばしば引用されるものの、玄一の著作は、元暁や憬興らのそれとは違い、さほど注目されなくなっていくようである。

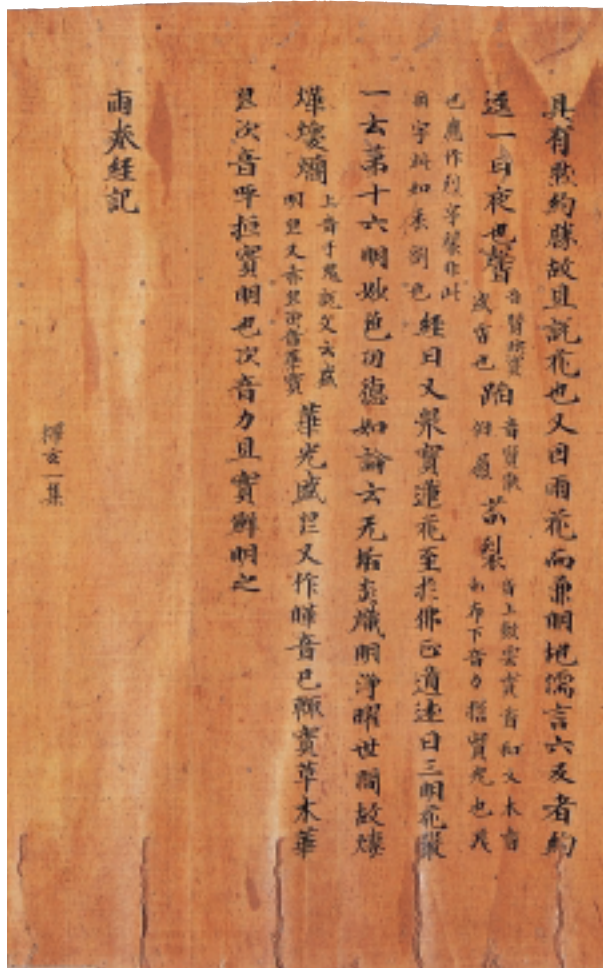
このように玄一を祖上に上げた話題の一端を垣間見た訳であるが、玄一のみを主題とする研究は決して多くない。その中でも元暁や憬興らといった新羅浄土教の諸師との比較においてのみその名を見ることができ。その大きな原因は現存する著作が本書の上巻のみであるということであり、更に現在の問題としては、唯一現存の『無量寿経記』ですら校訂作業が十分とはいえない状況にあるからである。

現在『無量寿経記』は、『正統蔵経』第

三十冊に所収されており容易に繙くことが出来る。これは京都大学蔵本(以下京大本)が底本になっており、更にこの京大本は、大谷大学蔵本(谷大本)を青写真で複写したものである。谷大本を複写したことは、蔵書印から容易に確認できる。

谷大本の奥書には  
嘉永七年甲寅首夏中旬第一日騰写  
竟 右原本在濃州興雲寺

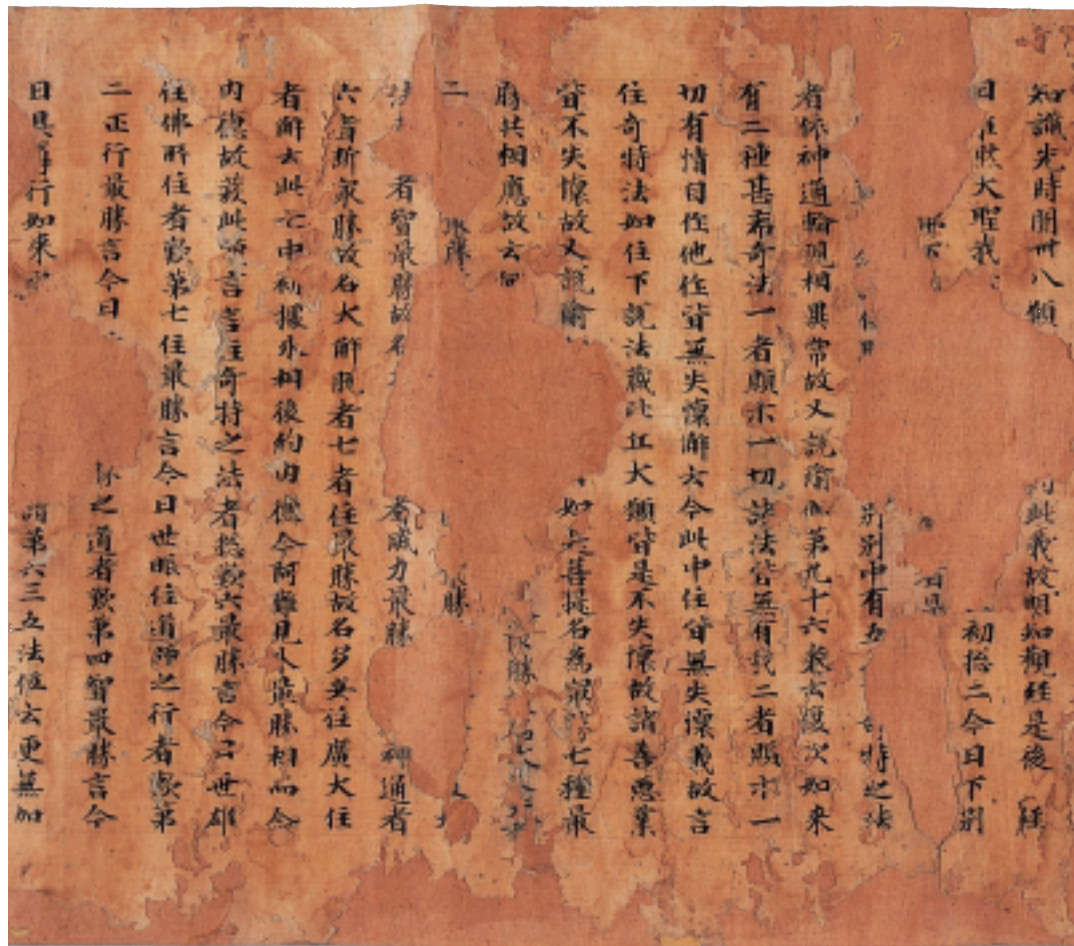
とあり、嘉永七年(一八五四)の書写であることがわかる。谷大本は書写原本の破損箇所を墨線で表記し、可能な限り朱筆で補填している。この谷大本の青写真の複写に朱筆で校訂註を加えたものが『正統蔵経』に収録される。京大本は



【図1】書陵部蔵『無量寿経記』巻末

谷大本の誤字を修正したり、改行を指示したりして読解の便宜を図り、詳細な註を施している。しかしながら、今回その底本である谷大本と、書陵部蔵本とを比較してみると、多少なりとも問題を孕んでいることがわかってきた。

上巻が三軸に分かれており、本文が一部



【図2】書陵部蔵『無量寿経記』冒頭部

欠落している。首欠ながらも丁寧な楷書で書写されている。

この欠落を補うのが大谷大学蔵、順芸（一七八七〜一八四七）書写本である。

この書写時期は不明であるが、書陵部蔵本と比較してみると、行数、文字数、字体、さらには墨線による破損箇所の手取りなどが書陵部蔵本と全く同じである。

これほどまでに同様であるので、順芸が書陵部蔵本そのものを書写したと推測できよう。

順芸は江戸後期の真宗大谷派の学僧であり、越前浄勝寺の順慧が父である。

『金剛経』『金剛般若論』を研究する際に、黄檗版蔵経より高麗版蔵経の方が優良であることを知り、そこで辛苦を重ね、

浄勝寺蔵の黄檗版蔵経と建仁寺蔵の高麗版蔵経の校訂を九年の歳月をかけて完成させている。そしてその作業は三

回行つて校了としている（田代俊孝「越前丹山文庫所蔵麗蔵校合黄檗版一切経について」『印度学仏教学研究』三〇―二、一九八二年）。

さて書陵部蔵本を中心に据え、順芸書写本をその欠落を補うものとして位置づけて、谷大本と比較してみると、谷大本（京大本）には、書陵部蔵本の一行

分に相当する箇所脱落がある。加え

て、文章の一部に数行単位で文章が前後に逆転している箇所が確認できる。そしてそれは『正統蔵経』がそのまま踏襲しているもので、このままでは文章が混乱しており意味が通じない。

ここに改めて書陵部蔵本の重要性を確認し、定本を作成する必要性が出てくる。今回は紙面の都合上、定本の試みを提示できないが、他にもう一つ興味深いことに触れておきたい。

それは諸本を比較検討してみると、書陵部蔵本のみ冒頭の六行分が残存していることである。かなり破損がひどく、一見して何について論じているのかが分からない。その為か、順芸があれほど緻密に書写していたにもかかわらず、この冒頭の六行は書写されていない。ここには『無量寿経』と『観無量寿経』の説時

順序についての議論がなされている。かつて窺基、龍興、憬興、迦才等が議論し、日本に渡ってから議論された問題の断片が、書陵部に残されていることの意味は大きい。

【附記】 今回の執筆並びに掲載資料に関しては、宮内庁書陵部の中村一紀氏に御高配を賜りました。厚く御礼申し上げます。

（研究員（PD）

# 活動記録

## 公開シンポジウム

デジタルメディアの活用の今後を探る

平成19年度は公開シンポジウムを開催した。講演者及び講演題目については次の通りである。

テーマ「仏典のテキスト学—データベースと

日本古写経—」

平成19年12月1日(土)午後1時30分～5時

於 国際仏教学大学院大学

木村清孝(国際仏教学大学院大学教授・学長)

「仏教におけるテキストとその媒体」

下田正弘(東京大学大学院教授・大蔵経テキスト

データベース研究会代表)

「仏教学デジタル・アーカイブの構築に向けて

—「大正新脩大蔵経テキストデータベース」

次世代の局面—」

积惠敏(台湾法鼓仏教研修学院院长・国立台北

芸術大学教授・中華電子仏典協会

主任委員)

'A Study on Creation and Application of CBETA Electronic Tripitaka Collection (Version 2007)'

落合俊典(国際仏教学大学院大学教授)

「漢訳仏典研究の新たな視座—日本古写経のデータベースとSAT & CBETAの利用—」



会場の様子、当日の参加者は約100人(右端は司会の林寺正俊研究員)。

果や、他の言語で伝承された同類のデータベースと協働させるならば、「超テキスト」へと変貌するという。

积惠敏氏は、中華電子仏典協会(CBETA)によるCBETA電子仏典集成バージョン2007の作成と使用について述べられた。その使用については、經典目次検索・全文検索・しおり・外部連結などを紹介し、実際にパソコンの画面上でCBETA電子仏典集成のソフトを立ち上げてわかりやすく説明された。最後に、世界中のアーカイブと連携し、Integrated Buddhist Archivesの可能性を見出せるのではないかとまとめられた。

落合氏は、平安鎌倉写経が「一字千金」の古形態を残していると論じられた。奈良写経は隋唐写経に繋がるものであり、平安鎌倉写経は奈良写経の転写本である。ただ、誤写を多く含むため、諸刊本に一致しない独自の文字が存した場合、それらを恰も溪流から掬い取った砂利をよく漉して砂金を取り出すが如く精査することによって、「一字千金」を得られると述べられた。

永崎氏は、仏教研究におけるデジタルメ



講演される下田正弘氏



パネルディスカッションの様子。左より、落合、积惠敏、永崎、木村の各氏。

ディアの利用の歴史と、そして今後の展開を述べられた。仏教学においては、有力学会が積極的にデジタルメディアの利用に関わってきた。そして、今、「大正新脩大蔵経データベース」が完成したが、今後、技術や規格に主導されるのではなく、仏教を研究する上での必要性から見て有益な仕組みを作り上げていくべきであり、また常に再検討が行われ続けなければならないと述べられた。

講演の後、パネルディスカッションが行われた。今回の主題は、デジタルメディアを用いたデータベース化などであり、今後更に発展していく分野であるため、例えばテキスト検索と絡めた古写経画像の活用方法など詳細な部分について質疑応答があり活発な議論がなされた。そして、盛会の内にシンポジウムは幕を閉じた。

## 公開研究会

古写経を様々な角度から研究する

昨年度第3回、及び今年度第1回・第2回公開研究会について報告する。全て本学において開催された。日時・発表者・発表題目、及び詳細については次の通りである。

○平成19年度第3回公開研究会

平成19年11月17日(土)午後3～5時

箕浦尚美(国際仏教学大学院大学学術フロン

ティア研究員)

「金剛寺藏佚名説話集に引用された経典の考察」  
池麗梅(東京大学東洋文化研究所外国人研究員)

「『穢積金剛法禁百変法』について」

上川通夫(愛知県立大学教授)

「東アジアの大蔵経世界と日本中世一切経」

箕浦氏は、金剛寺藏の仏教説話集に収められる経典を典拠とする説話について、本生経類との相違点から、それらが日本で作成された可能性があると述べられた。池氏は、『穢積金剛法禁百変法』の真偽問題について再検討された。上川氏は、結縁・勧進形式で、版本の権威性を下敷きにしつつ、



箕浦尚美研究員

書写にこだわって作成された日本中世一切経の歴史的特質を考察された。

○平成20年度第1回公開研究会

平成20年5月24日(土)午後3～5時

林敏(国際仏教学大学院大学博士課程)

「日本古写経本『首楞嚴経』について」

箕浦尚美(国際仏教学大学院大学学術フロン

ティア研究員)

「『金剛寺本』観無量寿経』について—諸本

校異からみた系譜—」

江南和幸(龍谷大学名誉教授)

「アジアの紙の起源を中国・中央アジア伝来

仏教経典、古文書に探る」

林氏は、日本の平安鎌倉古写経と高麗版

などの刊本一切経とは、『首楞嚴経』巻七

が大きく相違していることを力説された。

箕浦氏は、『観無量寿経』諸本の本文比較から

金剛寺本の価値を論ぜられた。江南氏は、

プロジェクトを用いて料紙の繊維の拡大

写真を示しつつ、紙の原材料の変化について

述べられた。

○平成20年度第2回公開研究会

平成20年10月11日(土)午後3～5時

定源(王招国)(国際仏教学大学院大学学術

フロンティア研究補助員)

「新出の日本古写経本系『護浄経』について」

林寺正俊(国際仏教学大学院大学学術フロン

ティア研究員)

「版本と日本古写経から見た『五苦章句経』

編集の問題」

吉川也志保(東京文化財研究所保存修復科学

センター研究補佐員)

「古写経の予防的保存に関する考察」

定源氏は、大正蔵本とは本文の異なる日本

古写経本『護浄経』を、版本系統と比較検討された。林寺氏は、『五苦章句経』について、本文が一部異なる版本系統と日本古写経本とは、共に先行する幾つかの経典の一部を寄せ集めて編集した作品である可能性が高いと論じられた。吉川氏は、虫・カビなどの有害生物による古写経の劣化に着目し、それらに対する予防的保存について説明された。

今年度第3回公開研究会の報告については、次号に掲載する予定である。

## 出版物紹介

『佛敎文献と文学 日臺共同ワークショップの記録 2007』



(2008年9月30日刊行 非売品)

日台研究者の最新成果がここに！

本書は、平成19年6月に京都大学人文科学研究所の21世紀COEと台湾の南華大学と本学学術フロンティアと共同で開催された日台共同ワークショップにおける成果をまとめたものである。その内容は、以下のとおりである。

第一章 金藏論の最前線

「中国佛敎類書と『金藏論』」 宮井里佳

第二章 佛敎説話をめぐって

「佛經『鴈銜龜』故事的傳播與影響—以中

國文學與日本文學爲例—」 梁麗玲

「『賢愚經』諸本比較研究—敦煌本と日本

古寫経本を中心に—」 三宅徹誠

第三章 一切經の諸相

「初論『開寶藏』向西域的流傳—西域出土

印本漢文佛典研究(二)—」 王丁

「日本古寫一切經中の唯識二十論後序」

落合俊典

第四章 文學をめぐって

「日本に舶載されたへ孔子童子問答話」に

關する二、三の問題」 牧野和夫

「《西遊記》的佛學主題」 依空

第五章 禪宗文獻

「北宋禪宗『讚』的演變與發展」 蔡榮婷

「敦煌本《秀禪師七禮》研究—兼論北宗禪

與禮懺的關係—」 汪娟

第六章 唐代の佛敎文獻

「敦煌佛敎文獻傳播與佛敎文學發展之考

察—以《金藏論》、《法苑珠林》、《諸經

要集》等爲核心—」 鄭阿財

「大唐三藏玄奘法師表啓に關する一問題

—玄奘と長命婆羅門—」 高田時雄

仏教学、日本文学、中国文学などの立場から、仏教文献と文学について多彩に論じられており、まさに日台の学術文化交流の様相を呈した一書となった。なお、これを継承する形で今年度は、10月24・25日に台湾の南華大学と仏光山において国際学術研究会が開催された。このような活動を契機として、今後も新しい課題と成果が現れてくることが期待される。

(研究員(PD)恋田知子)

## 今後の活動予定

平成21年度の予定は以下の通りです。

### ◇公開研究会◇

5月23日(土)、10月10日(土)、11月14日(土)に、国際仏教学大学院大学にて開催予定です。

### ◇公開シンポジウム◇

12月5日(土)に、国際仏教学大学院大学にて開催予定です。

本学・学術フロンティアのホームページ(下欄参照)にて、講演者・題目等の予定を随時お知らせしておりますので、ご確認ください。皆様のご来場をお待ち申し上げます。

## 既刊書

### ○日本古写経善本叢刊(非売品)

第1輯『玄應撰一切経音義二十五卷』

第2輯『大乘起信論』

### ○『日本現存八種一切経対照目録』(非売品)

本書は、ホームページ上でダウンロードできます。

### ○『佛教文獻と文學 日臺共同ワーク

ショップの記録 2007』(非売品)

## 『いとくら』既刊号

### ○創刊号

『摩梨支天経』—金剛寺本と敦煌本—  
方廣鋳

金剛寺経巻の紐／道明新一郎

古写経の死番虫／吉川也志保

寺院紹介・調査日記「金剛寺」「七寺」

その他

### ○第2号

七寺の経蔵／中村一紀

スクロールビューアについて／村川猛彦

金剛寺一切経と安世高の漢訳仏典／

アレクス フロリン

天野山金剛寺の浄土教典籍／落合俊典

古写経と微生物／吉川也志保

寺院紹介・調査日記「西方寺」その他

### ○第3号

七寺一切経にみる経軸の意匠の相違について／

赤尾栄慶

古写経の色／吉川也志保

檀王法林寺蔵『集諸経礼懺儀』巻下について／

上杉智英

現存最古の大唐西域記写本／高田時雄

寺院紹介「檀王法林寺」 その他

『いとくら』のバックナンバーを希望される方は、学術フロンティア実行委員会までご連絡ください(連絡先は下欄参照)。



## 学術フロンティア・スタッフ紹介

### 研究代表者

今西順吉(国際仏教学大学院大学教授、国際仏

教学院理事)

### 研究分担者

木村清孝(国際仏教学大学院大学学長、教授)

落合俊典(国際仏教学大学院大学教授)

Hubert DURT(同・教授)

津田眞一(同・教授)

アレクス フロリン(同・教授)

松村淳子(同・教授)

赤尾栄慶(京都国立博物館学芸部企画室長)

高田時雄(京都大学人文科学研究所教授)

梶浦 晋(同・附属漢字情報研究センター助手)

Christian WITPERN

(同・附属漢字情報研究センター准教授)

宇都高巖吾(大阪大谷大学教授)

大倉孝昭(同・教授)

中川 優(和歌山大学教授)

村川猛彦(同・専任講師)

### 研究協力者

末木康弘(国際仏教学大学院大学附属図書館副館長)

堀伸一郎(国際仏教学大学院大学附属国際仏教学

研究所副所長)

佐藤愛弓(大谷大学助教)

能島 覚(佛教大学総合研究所嘱託研究員)

三宅徹誠(国際仏教学大学院大学附属国際

仏教学研究非常勤研究員)

林 敏(国際仏教学大学院大学博士課程)

吉川也志保(東京文化財研究所保存修復科学

センター研究補佐員)

相原良直(華頂短期大学教授)

岡崎友子(就実大学准教授)

広坂直子(京都外国語大学非常勤講師)

江南和幸(龍谷大学名誉教授)

坂本昭二(龍谷大学古籍デジタルアーカイブ

研究センター研究員)

上杉智英(中国政府奨学金高級進修生(中国人民

大学)、元学術フロンティア研究補助員)

池 麗梅(ブリティッシュコロンビア大学大学院博士

課程、元学術フロンティア研究員)

佐藤もな(帝京高等看護学院非常勤講師、元学

術フロンティア研究員)

大塚紀弘(日本学術振興会特別研究員、元学術

フロンティア研究員)

研究員(PD)

林寺正俊・箕浦尚美・恋田知子・田中秀典・南 宏信

研究補助員(RA)

赤塚祐道・定源(王招国)

(平成20年12月現在)

文部科学省 私立大学学術研究高度化推進事業

学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」ニュースレター

いとくら 第4号

平成20年12月10日発行

編集・発行

国際仏教学大学院大学

学術フロンティア実行委員会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5-3-23

URL <http://www.icabs.ac.jp/frontia>

E-mail [frontier\\_20@icabs.ac.jp](mailto:frontier_20@icabs.ac.jp)

印刷 株式会社 高山